東堀河（ひがしほりかわ）―古代の人工河川―

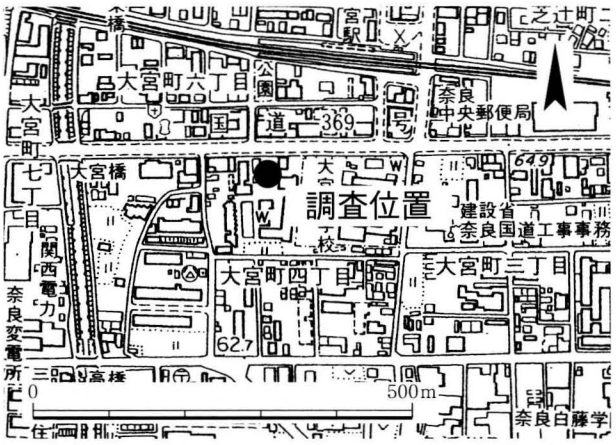
平城京東堀河跡　奈良市大宮町4丁目

近鉄新大宮駅から南西へ徒歩3分ほどの場所で、民間の開発工事に伴う事前の発掘調査を実施したところ、奈良時代の掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）をはじめ、大量の遺物を含んだ東堀河、護岸（ごがん）施設等、数々の遺構を検出しました。東堀河は、奈良時代につくられた人工の河川で、物資の運搬をするにあたって重要な位置をしめていたようです。この地域で東堀河を発見した意義は大きく、東堀河の施工計画を知る上での重要な成果となりました。

調査の概要　東堀河が検出された場所は、平城京の条坊復元では、左京三条三坊十一坪に相当するところです。

今回検出した東堀河は、川幅が何回か変わったようで、一番狭い時の川幅は約5.1m、広い時は、西岸が発掘区外となるため正確な川幅はわかりませんでしたが、幅12.2m以上もありました。掘形（ほりかた）は2段掘りで、東岸には、幅約2.0～3.2mのテラス（平坦面）があり、以下なだらかに川底へいたります。川底の形状は、一部侵食されていますが、ほぼ平坦です。最深部は、検出した面からの深さが約1.5mあり、また、川底の標高（発掘区の北端60.5m、南端60.3m）からみて、東堀河の水は、これまで通り、北から南へと流れていたことがわかりました。

東堀河が埋まった土（堆積土（たいせき））は、大きく4層に大別でき、上から順に黄灰色系の粘土・灰色砂質土（上層）、黒灰色粘土（中層）、灰色砂礫（下層）、灰色粗砂（最下層）となっています。川底に最下層の砂（厚さ0.3m）が堆積した後に、一旦、東掘河の幅を狭めた時期があり、部分的に護岸工事を行なった形跡が残っていました。この時の東堀河の幅は約5.4mで、西岸に沿って南北１列に木杭を打ち込み（14本分検出）、束（たば）ねた小枝を杭の西側にあてがい、黒色粘土で固めて養生していました。水の侵入をせきとめるための工事と考えられますが、灰色砂礫（下層）が堆積した頃に再び川幅が広がり、護岸杭がまたたく間に埋没した様子がうかがえます。この下層と最下層の堆積土は、明らかに流水によるものであり、当時の東堀河の水流がかなり激しいものであったことを示しています。中層の黒灰色粘土が堆積した頃は、水が淀（よど）んだ状態になっており、川幅は5.1m、深さも1.0mと小規模になります。この頃は、悪臭（あくしゅう）の漂（ただよ）う汚い川になっていたのではないでしょうか。上層に堆積している黄灰色系の粘土および灰色砂質土は、東堀河を最後に埋めた土です。東堀河は、10世紀前半頃までにはその姿を消すようです。



調査地位置図（1/10,000）

東堀河の出土遺物　奈良時代から平安時代にかけての土器、土製品、瓦、木製品、金属製品、銭貨（せんか）が遺物整理箱で約70箱分出土しました。日常雑器の他に、斎串（いぐし）、人形（ひとがた）、土馬（どば）、人面墨書土器（じんめんぼくしょどき）等の祭祀（さいし）遺物も見つかっています。これまでの発掘調査でも東堀河からは多量の祭祀遺物が出土しています。このことは、東堀河は物資運搬だけではなく、平城京の住民にとっては祭祀を行なう絶好の場であったことを物語っているのでしょう。

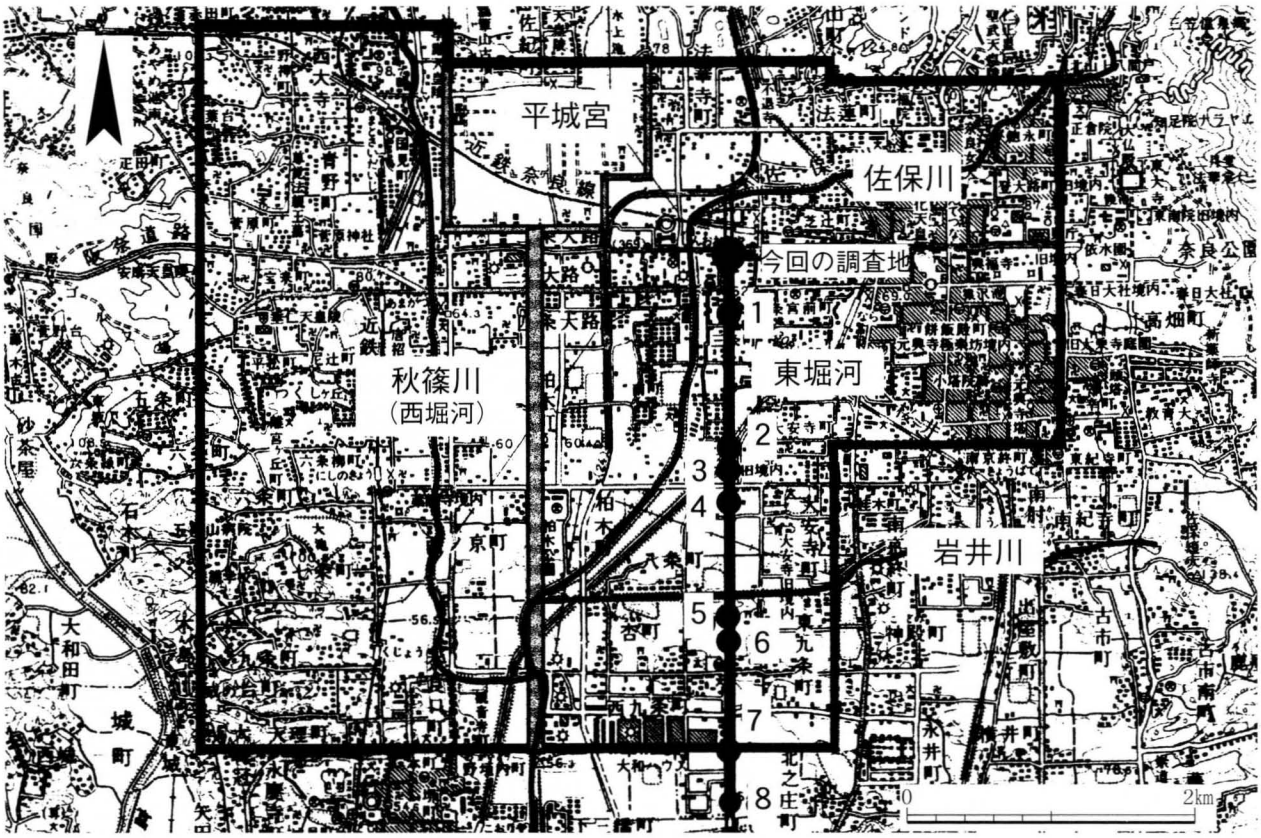
東堀河東岸の空間地　今回の調査では、東掘河の東岸で掘立柱建物を検出しています。建物は、東岸から2.0m以上の間隔をあけて構築されていました。過去に実施した東堀河の調査例でも、東岸に沿って約3.0～6.0m幅の空間地があることが判明しています。この空間地は、一種の道路として使われていた可能性が高いと考えられています。

東堀河と西堀河　平城京の堀河について、もう少し詳しく記しておきます。平城京や平安京には、物資を運搬するためにつくられた堀河が2条あります。左京にあるのが東堀河で、右京にあるのを西堀河と呼んでいます。

平城京の東堀河は、これまでの発掘調査で、左京四条三坊十坪から南へ向かって流れ、九条大路を突き抜け、平城京外約50mまでつくられていたことが判明していましたが、三条以北がどのようになっていたのかわかっていませんでした。

今回の調査で、三条の地域にまで施工されていたことが判明しましたので、東堀河はこれまで考えられていたところより、もう少し北からつくられており、奈良時代に左京二条大路付近（現在の近鉄新大宮駅の西側）を西流していたと考えられている旧佐保川（さほがわ）から端を発している可能性が高まってきました。

一方、右京にある西堀河は、本格的な発掘調査が行われていないため、どのような構造で、どこ（ごこく）を流れていたのかよくわかっていません。「護国寺本薬師寺縁起（じもとやくしえんぎ）」や「今昔物語（こんじゃくものがたり）」の文献資料中に西掘河についての記載があり、位置関係等の検討から、現在の秋篠川を西堀河と呼んでいたことがわかります。現在では、秋篠川が西堀河であるとの説が有力です。平城京廃都後に西堀河としての機能が失われても、もともと自然の河川である秋篠川は、東堀河とは違い、現在に至るまで埋められることもなかったのでしょう。



今回の調査地	平城京左京三条三坊十一坪	（市・HJ第499次調査）
地図番号1	平城京左京四条三坊十坪	（市・HJ第314次調査）
地図番号2	平城京左京六条三坊十坪	（市・HJ第284次調査）
地図番号3	平城京左京六条三坊十坪	（市・HJ第52次調査）
地図番号4	平城京左京六条三坊十一坪	（市・HJ第138・141次調査）
地図番号5	平城京左京八条三坊九坪	（国・1975年度調査）
地図番号6	平城京左京八条三坊十坪	（市・TI第4次調査）
地図番号7	平城京左京九条三坊十一坪	（国・1982年度調査）
地図番号8	平城京外	（市・HJ第296次調査）

平城京の東堀河・西堀河と調査地位置図・表